

はじめまして、しょーへいといいます。

この度は僕の自己紹介レポートに興味をもってくださいありがとうございます。

このレポートでは僕が大学生にしてなぜビジネスを始め、  
現在に至るのかについて話をしていこうと思います。

ではではここから始まりです。

僕はいま大学に通いながらも個人事業主として

- ・ Amazon を販路とした物販ビジネス
- ・ ライターさんを外注化させてサイト運営
- ・ メルマガ、ブログ、YouTube、Twitterなどからの情報発信

などですかね。

物販では月収20万を突破して、  
他にも自動的に収益を生み出す仕組み作りを着々と構築しています。

と言っても大学生で不労所得とか怪しすぎますよね。  
僕も最初は信じられませんでした。

しかし今ではこのような一見、  
非常識な世界が当たり前になり日々充実した生活を送っています。

僕はもともと自分で大学生のうちに起業してビジネスやるなんてことは  
全く考えたことがありませんでした。

僕の中で起業するということは、  
資金がたくさん必要だったり人脈が必要だったり  
選ばれし人間にしかできないものだと思っていました。

そんな僕でもある出会いをきっかけに  
価値観が粉々にぶっ壊されビジネスを始めることになります。

それではここから僕の人生をさかのぼって  
幼少期のころから話していこうと思います。

僕は出産予定日より早く生まれたので、  
標準体重よりも小さく生まれた。

小さい頃は病弱でまた1人っ子だったため、  
心配をかけながらも親の愛情を一身に受けて大切に育てられた。

1人っ子には2つのタイプがある。  
わがママを言うタイプと言わないタイプだ。

その中でも僕は圧倒的に後者だ。わがママなんて言わない。

別に親がめちゃくちゃ厳しくて  
僕がわがママを言っても聞いてくれないというわけではない。

むしろ何が欲しいの？何やりたいの？どこ行きたいの？とか  
よく聞いてくれた。

周りは僕のためを想っているいろいろと考えてくれるのだが、  
でもそれはそれで結構子どもは気を遣うのである。

ちょうど僕が小学校低学年のとき、  
両親とじいちゃんとはあちゃん5人で  
ご飯食べに行くことになったときもそうだった。

「今日の夕飯まだ何も決まってないから好きなの選びなさい。」  
と言われるのだ。

僕はこの言葉に毎回悩み苦しむ。

僕はこんなこと言われてもやったー！好きなもの食べれるー！  
という気持ちよりかは、

いやあんま好き嫌いないからなんでも食べれるし、  
っていうか選択権を全て自分に押し付けないでほしい  
という気持ちのほうが強かった。

だからといってなんでもいいと僕が答えると、  
いいから早く決めると親にイライラされるので、  
空気を察してさっさと決めることにした。

候補は中華、和食、焼肉、イタリアンとかあって  
どれでもよかったのだが、とりあえず焼肉に決めた。

しかし食べ始めて30分くらいたつと、  
ばあちゃんの箸があまり進んでないのだ。

親がみかねて「ばあちゃん大丈夫？」と聞くと  
ばあちゃんは「いやー最近はもうお肉を食べるのが大変でねえ……」  
と、こぼすのだ。

ふむふむ。どうやら僕は完全に選択ミスをしたようだ。

まだ幼かった僕は人は年をとるにつれ  
肉よりも魚を好むことをよくわかっていなかった。

和食にしておけばよかったなと後悔してる時、  
続けてばあちゃんが言うのだ。

「でも孫が喜んでるならそれが私の幸せだよ。おいしいかい？」と。  
僕にできることは1つしか考えられなかった。

「うん！おいしいよ！」と可愛い孫にしかできない純真無垢なスマイル  
で答

えるのがベストアンサーだと僕は悟った。

僕は正直ばあちゃんには申し訳ないことをしたなと罪悪感に苛まれてい  
た

が、そんな様子は微塵も出さないようにした。

僕が申し訳ない顔をしていたらばあちゃんの苦勞が報われない。

だからとびっきりの笑顔をつくったのだ。

その場はとりあえず乗り切ったが、僕は悲しかった。

確かにばあちゃん含めて周りの人は、僕が幸せならそれでいいと思っ  
る

かもしれない。

でも僕は周りの人みんな喜んでないと素直に喜べないのだ。

なにも楽しくないのだ。

まあこんな感じのことが何回かあって、

相手の気持ちを考えないとロクなことが無いなと思い、

僕は他人の顔色を伺うわがままを言わないタイプの1人っ子になっていっ  
た。

このように周りはせっせと僕のことを中心に考えてくれてもちろん嬉し  
いのだ

が、その強い思いは裏を返せばプレッシャーを感じることも多々あった。

子どものくせに気を遣いすぎじゃないかと思われるかもしれないが、子  
ども

だからこそそういったことには敏感なのである。

敏感なおかげで良く言えば常に相手の立場になって物事を考えるようにな  
な

ったし、悪く言えば自分の気持ちを押し殺すようになった。

そんな中で僕は学校ではとにかく誰からも好かれていた。

これはただの主観ではなく本当にそうだったと思う。

子どものころなんてみんな自分勝手にわがままだ。

だから周りのことを考えがちな僕は希少な存在でうまく友達と絡めたの  
だろ

う。

あと勉強においても一目置かれる存在だった。

例えば九九は誰よりも先に言えるようになったし、漢字も誰よりも読め  
たり書

けたりした。

すると周りからはすごいねとか賢いねとかよく言われるようになった。

こうして僕は学校で優等生ポジションを確立した。

それから僕は誰からも信頼され影響力を持つようになった。

僕が右といえば右に、左といえば左に動いていたのだ。  
だれも僕が言うことに反対する奴はいなかった。  
そしてこのとき僕は錯覚していた。  
もしかして自分は全知全能なる神なのではないかと。  
割と本気で思っていたときがあった。  
正直いって、これは今思い出すだけでも発狂したくなるくらい恥ずかしいの  
だが。  
そして僕は優等生ポジションを築き上げることで多大な恩恵を受けていた。  
例えば僕は中学のときバスケット部に所属していた。  
ちょうど試合をしているときにボールがコートから出てしまいそうになったの  
で、ボールに向かって必死にダッシュした。  
ギリギリ追いついたのだが、勢い余ってちょうど火災警報器に激突してしま  
った。  
するとジリリリリリリリリリリリリリリリリと体育館全体に警報が響き渡った。  
そしてそれは職員室にも知らせが入ったらしく  
校長、教頭、学年主任、生活指導の先生という学校のトップ4が総出で  
イライラしながら体育館にわざわざ出向いてきたのだ。  
当時僕が所属していたバスケット部は問題児がたくさんいて  
先生たちからはよく警戒されていた。  
だから先生たちはまたあいつらがふざけて問題を起こしやがったと思っ  
て  
もう説教する気満々なのである。  
さすがにこれはヤバいと察した僕は、急いで先生たちに  
「たまたまなんです。本当にわざとじゃないんです。」と言うと  
今まであんなにイライラしてたのに、  
まるで人が変わってしまったかのようにあっさり許してくれた。  
ほんの5秒ほどの弁解だった。

まあわざとじゃないし許されるのは当たり前なのだが、あまりにもあっさりすぎた。

このとき僕が許されたのは成績が良かったからだ。

優等生だったからだ。だから信じてくれたのだ。

もし仮に自分がわざと火災警報器を鳴らして周りに迷惑をかけたとしても

僕がわざとじゃないですと嘘をつけば先生たちは僕の嘘を見破ることが出

来ず、信じてしまっていたらう。

裏を返せば、問題児の言うことは誰も信じてくれないのだ。なんて不憫なん

だ。

そういえばこんなことがあった。

授業中に友だちとうるさく喋ってしまって、先生に怒鳴られたことがあった。

しかし残酷にも注意されたのは友だちだけだった。

別に僕は先生の弱みを握っていたわけではない。

親がPTAのお偉いさんで先生は俺に口出しできないとかいう裏事情も全く

ない。

ただ単純にその先生は僕が授業中うるさくするはずないと思い込んでいた

のだ。

僕の優等生ブランディングは恐ろしいほど洗練されていたのだ。

僕は確かに自分の優等生ポジションに味をしめてはいたが、この不平等に

も嫌悪感を感じていた。

正直先生たちの態度の変わりようを当時は軽蔑していた。

ただこれが社会の現実なのかなという諦めに似たようなものもあった。

僕は小学校と中学校の9年間はこの優等生ポジションのおかげで多くの恩



恵を受けてきた。

それと同時に問題児とか他人に勘違いされやすい友だちが身に覚えのない

疑いをかけられて損をする姿も嫌というほど見てきた。

自分が何をやったかではなく、周りがどう思うかそれが大事なのだということ

を痛感する機会が多かった。

だから僕の行動の基準で1番優先されるのは常に周りにどう思われるかが

重要視されていくようになった。

そんな僕は他人に嫌われるのがものすごく怖い。優等生ブランディングもそ

れを覆い隠すためのものだった。

クラスが騒がしくてしょうがなかったときに僕はお前らうるさいぞ！と注意し

た。

いつもならこれでクラスを制圧出来るのだが、

あるとき遠くからいやお前がうるせーよという声が聞こえた気がしたのだ。

ほんとギリギリ聞き取れるかなぐらいの声だったので、もしかすると僕は聞

き間違えたのかもしれない。

いやきっとそう思い込みたかったのだろう。

たった一言ボソッと言われたただけだったが、僕は今まで誰からも齒向かわれ

たことはなかったのでショックだった。

初めて僕は反逆されたのだ。クーデターだった。

僕はそれまで全ての人から好かれていると思っていた。全ての人への僕に

対する印象をいい人にコントロールすることができると思っていた。

しかしこの出来事をきっかけに僕は全ての人から好かれているという仮説が

間違っている可能性が出てきてしまったのだ。

なんてことだ。

僕のことを嫌いな人はゼロだと思ってたのが、1人いるのかもしれない。

いや1人がそう思ってるなら他の人もそうかもしれない。

考えれば考えるほどきりがないのだ。

当時の僕にとって自分のことを嫌いな人がいる可能性がゼロでなくなっ  
てし

まうことは大事件だった。

それから僕は今まで以上に人の顔色を伺うようになっていく。誰からも  
好か

れるような人を目指して。完璧を目指して。

でもそんなこと気にしているのは僕だけ。ただそれほどまでに人に嫌わ  
れる

のが怖かった。

僕はたかがこんなことでいろいろ気にしてしまう繊細でナイーブなやつ  
だっ

たのだ。

それから僕は中学を卒業して、県内の公立高校に進学した。

どのぐらいの偏差値かというと、東大に合格する人が年に数人出るくら  
いだ

僕はその高校にギリギリの成績で合格した。

もちろんそのときはすごくうれしかったが、

それと同時に、いやそれ以上に不安も大きかった

ギリギリで合格したということは自分は学年の中でも成績は下の方で、  
あなたは落ちこぼれ予備軍ですよーと高校から言われてるようなものだっ

た。

僕は落ちこぼれになんかなりたくなかった。

だって小学校と中学校の9年間でずーっと優等生ポジションで信頼さ  
れる

ことで人間関係を有利に進めてきたからだ。

それが高校に入って成績も下の方になり、落ちこぼれになる自分なんて  
想

像ができなかった

想像できないが故にすごく恐ろしかった

世の中に絶対的な優等生はいないのだ。

あくまで学校やクラスで1番優等生っぽいやつが  
優等生ポジションに君臨するのだ。

僕は中学までの優等生ブランディングがリセットされ、  
高校という新しい環境に足を踏み入れるのが嫌だった。  
どう振る舞えばいいのか分からなかった。

そして高校に入学する前の春休みに学校側から課題を出された。  
どうやら入学式の2日後ぐらいに1発目の実力テストがあるらしく、  
その課題はそのテストに備えるためのものだった。

というわけで同じ高校に入る他の人たちが

「高校入試終わったぜ！ヤッファー！」とおそらく春休みを満喫してるな  
か、

僕は虎視眈々と周りに負けないようにテスト勉強を始めたのだ。

そして4月になって入学式が終わり、テストも終わり、遂に成績が発表  
される

時が来た。

うちの高校では成績優秀者として上位30人くらいが掲示板みたいな  
のに貼

り出される。

だが僕はそんなものには縁がないと思って、全く興味を示さなかった。

僕としては平均点でもとれば今回は万々歳なのである。

そう思った矢先に、ここで思いがけないことが起こる。

クラスメートに「お前の名前がのってるぞ！」と言われたのだ。

僕は「そんなはずはない。きっと何かの間違いだらう。」と思いつつも  
見に行

ってみると

そこには僕の名前があった。

しかも上から2番目だった。

僕は10秒くらい自分の目を信じるができなかった。  
でもそこには紛れもなく学年で2位をとった僕がいたのだ。  
このときはもう嬉しすぎて有頂天になっていたが、  
いま振り返ってみると、それは地獄の日々の始まりでしかなかったのだ。

それから僕は急にクラスで勉強ができる優等生ポジションに認定され、  
クラ  
スマートからよく勉強教えてよーとか頼られたりした。  
こうして僕は再び優等生ポジションに返り咲いたのだ。  
しかし僕は少しずつこの優等生ポジションに苦しめられていくのである。

まず定期テストが大変だった。  
何が大変って僕はクラスの中でいい点数をとって当たり前みたいな雰囲気  
ができてしまったのだ。  
僕はその空気感を裏切るのが怖かったから、高校ではいい点数をキープ  
す  
るのに死に物狂いだった。  
もしここでテストの点数とれなかったら周りは僕をどう思うのだろうか？

僕は今まで優等生ポジションで上手いことやってぬるま湯みたいな環境  
で  
育ってきた。  
そして気付いたら僕の居場所はそこ以外なくなっていた。  
そのポジションから陥落したら僕はどうなってしまうのだろうか？  
そんな想いを巡らせていた。  
僕にとって良い成績をとり続けることは勝手に義務だと感じていた。  
それから時は流れ、高3の春。  
部活も引退し受験勉強が本格的に始まった。  
当時僕はやりたいことも特になく、  
まだ志望校をどこにするか決めかねていたが、  
担任に東大に行きなさいと勧められた。

ここで最大の難敵が現れる。東大だ。

僕は知っていた。

先生たちが東大の合格実績がほしいことを。

僕以外にも一橋志望の子とかは積極的に東大が勧められていた。

僕も高校受験をするときに東大合格者数でその高校がどのくらいのレベル

か確認してたからよくわかる。

偏差値 70 よりも東大合格者数 10 人のほうがわかりやすい。

偏差値は相対的だが、合格者数は絶対的なものだからだ。

僕の高校の学力レベルでは東大合格に希望を持てるのは上位 10% ぐらい。

自分はその中にいた。

僕にとって東大を目指すことは間違っていないと思っていた。

合格すれば親が喜び、友だちも喜び、先生も喜ぶ。

無限にある人生の選択肢のなかで僕はこれが 1 番ふさわしい答えだと導き

出した。

しかし夏休みが終わっても成績が全く上がらず、僕は焦りはじめた。

それなら志望校を下げればいいじゃないかと思うかもしれないが、

僕の行動基準には常に周りにどう思われるか、どうすれば認められるかが

あった。

ここで志望校を下げたらダサいしかっこわるいじゃないかって。

いま考えると、むしろその考えのほうがダサいしかっこわるい。

今まで優等生として振る舞ってきただけにくだらないうプライドが邪魔してしま

うのだ。

そして受験が近づくにつれ先生、クラスメートから東大合格を期待されてい

く。

僕の成績は全く伸びる気配がなかったのだが、周りの期待は日に日に増し

ていった。

東大を目指してるだけでもすごいねとか合格してねとかいろいろの人に  
言わ

れる。1人1人は僕にプレッシャーかけようなんて思っていない。

でもその言葉を5人、10人と聞かされたら当時の僕はかなり重圧に感  
じてし

まっていたのだ。

大げさに聞こえるが、日本国民から金メダルを期待されるオリンピック  
選手

ってこんな気分なのかなって思ってしまうほどだった。

僕は9月ぐらいにはもう東大はさっさとあきらめたかった。

しかし高校のモットーには現役で国公立大学に合格することが圧倒的に  
よ

いとされていた。

指定校推薦は最後まで受験勉強頑張らないから甘えてるだとか、  
私立は科目数が少ないから甘えてるだとか。

誰も声を大にしては言わないが、そういう空気感があった。

僕はそういう空気感にただただ流されて、惰性で勉強していた。

なぜなら僕の行動の基準は周りがどう思うかだからだ。

ほんと今考えるとしょうもない。

勇気をだして先生に志望校下げたいですと言っても、

ここまで来て諦めるのはよくないだとか

みんな頑張ってるんだから頑張りなさいと言われた。

確かに合格してる人は最後まで諦めずに努力してるかもしれない。

でも努力した人が必ず合格して報われるなんてことはない。

東大を目指すことに僕の意志はもはやなくなっていた。空っぽだった。

目指している風に振る舞ったり、

自分は心から東大に入りたいんだと思いこむことで自己暗示をかけ、

周りが言うことを正当化しようとしていた。

両親は色々心配してくれていたのだが、僕はうっせえ！とよく突っぱ  
ねて

いた。本当に申し訳なかったなと今では思う。

このとき親に相談しようとは思わなかったのは  
言ってもわかってもらえないと勝手に決めつけていたからだ。  
しかしそうやって1人で抱え込むことで僕は勝手に孤独になっていった  
の  
だ。

そして事態は最悪の方向へと進んでいく。

僕は金縛りにほぼ毎日遭うようになっていた。

ちなみに金縛りは身動きができなくなり、呼吸もできなくなるので毎回  
死に  
かけている。

それでも僕は勉強のことしか頭になく、

夜中の2～3時くらいに金縛りに遭っても朝起きたら忘れていた。

毎日死にかけているのに朝起きたら忘れるとか精神異常でしかない。

金縛りだと気づいたのは卒業式終わったぐらいだった。

「あ、そういえばあの時の体動かなくなるやつ金縛りじゃね？」

みたいな感じだった。

気づくのが遅すぎる自分にゾッとした。

そしてそして受験は案の定大失敗した。

でも悔しさなんてものはびっくりするほど全くなく、

もう頑張らなくていいやという気持ちのほうが強くホッとした。

それで自分が金縛りになっていたことに気づいたとき、僕はなんてつま  
らな

い人生を送っているんだと思った。

僕は自分でも何のためにやっているのかわからない勉強をしすぎて毎日  
死

にかけていたのだから本当にばかばかしい。

それでも悪いのは自分だ。周りからどう見えるかばかり気にして周りに流

されて最終的に残ったのは虚無感だった。

心にぽっかり穴が空くとはこの状況を言うのかと初めて理解した。

受験が終わって何をしようか考えたときに僕は何も思いつかなかった。

やりたいことは何もない。将来的になりたい自分も今まで自分で考えたこと  
がなかった。

僕は最初自分の気持ちなんて押し殺してると思ってたが、それは違った。

他人に合わせていくうちにもはや自分の気持ちは消え失せていた。  
押し殺すほどの感情もない当時の僕は人間というよりはロボットに近かった。

僕はそんな自分が情けなかった。

今まで優等生として振る舞ってきただけに自分は周りよりもまともだと思  
い

こんできた。

だけど感情のないロボットのような自分にいざ直面すると、

自分ほどつまらない人間はいないなと

ただ唇を噛みしめることしか出来なかった。

でもこんなことでグダグダしている場合じゃない。

こんな死んでるのか生きてるのか分からない状態で

俺の人生くたばって死んでたまるかと思い始めた。

僕はとにかく時間が欲しかった。自分の人生を改めて考え直したかった。

常に誰からも好かれるように周りに合わせて、

自分を1ミリも狂いなく正確に調節するような人生とはおさらばして、  
自分の気持ちを大事にしようと思心から思った。

というわけで、親には浪人させてくださいと直訴し、なんとか納得して  
もらい

浪人することになった。

それでまず僕は早慶に志望校を下げた。

また東大なんか目指して金縛りになるのはどうしても避けたかった。

だから早慶に志望を落として、精神的負担を楽にして

自分のやりたいことを探す時間に十分に時間を費やせるようにした。

僕が入った予備校のクラスは50%の人が早慶に合格するところだった。

つま



りはこのクラスで平均点とることが早慶合格のボーダーラインということだ。

そして僕は1番最初のテストでクラス2位をとることができた。

高校のときに頑張ったおかげで早慶は射程圏内に入っていた。

でもこれで自分のやりたいこと探しに集中できる。

僕にとってはこっちの方が早慶より圧倒的に大事なんだ。

僕はまずやりたいことをみつけるために色々なことに興味を持とうと決心し

た。

しかし何をどうすれば見つかるのかが全くわからず、常に悩んで迷走してい

た。

1番ひどかったのは駅のホームで電車が来るたびになぜか飛び降りたくなっ

ていたことだ。

理解できないかもしれないが、決して死にたがっていたわけではない。

飛び降りたらどうなるんだろと興味をもっただけで、これは知的好奇心のべ

クトルが完全に狂ってた。

全然死にたくはなかったんだけど、生きていてもなんも楽しくねえわっ

と思ってた。

だからこのときはとにかく

僕は自分の知らない世界からやってくる新しい刺激に飢えていた。

そんな中で予備校の先生は学校の先生よりも面白い先生が多かった。

なかでも1番楽しかった授業は現代文。

雑談ばかりの先生だったが、この人にはかなり常識を破壊してもらった。

例えばテレビの情報を信じるのはバカだとか、

お前らは政府にとって都合のいい愚民集団だみたいなことも言われた。

先生はあえて僕らを刺激する言葉を多用して常識を疑うことを教えてくれた。

僕は週に1回の現代文の授業がたまらなく好きだった。

とにかくメディアの情報を鵜呑みにするな。

ちゃんと自分で正しい情報を得て真実を見極める的なことを散々言われた。

この先生の言うことを信じてなかったらネットビジネスなんてただ怪しいって

だけで頭ごなしに否定して突っぱねてただろうな。

常識を疑うことに抵抗が少なくなったのは

この先生のおかげだと言っても過言ではない。

あとこの人がおすすめる本はどれも面白かった。そしてこれをきっかけに

読書にはまっていく。

というのも今まで参考書しかよんでなくて、

新書とか古典とか今まで全く読んだことが無く、

どれを読んでも新しい世界が広がっていた

予備校が池袋にあったので、毎日ジュンク堂に行っては面白そうな本を探し

て、ちょっと立ち読みしたり買いまくってたりしてた。

受験勉強なんかしてないで、

もっと早く読書の素晴らしさに気づきたかったなとつくづく思った。

今までの受験勉強は与えられた範囲のなかで試験のために受動的にそして強制的に勉強してきたが、

読書とかは自分が読みたいと興味をもった本を何でも能動的にそして自由

に勉強できる。

あんなに今まで勉強してきたのに、

勉強の楽しさの醍醐味をやっとこの浪人生活で知ることが出来た。

そしてこれがこの1年間で何よりも1番の収穫だった。

それから勉強を楽しむことができるようになると、

成績も順調に伸びていき最終的には慶應大学に合格することが出来た。

ただ肝心の自分のやりたいことは特に何も見つからなかった。

でも大学入ったら何か刺激的なものに出会えるだろうと楽観的でした。

だがそう長くは楽観的ではいられなかった。

大学に入学したものの最初の4月とか5月は新しいことばかりで楽しかった

が、6月にはもう割と飽きてきた。

まず授業はほんとつまらないし、

サークルは楽しいけど毎日あるわけじゃないから時間も余ってしまう。

日常がつまらなさすぎるから何か夢中になれるものがほしかった。

何もやりたいことはないが、

それでも何かやらなければという焦りを常に抱えていた。

そんな中6月のある日。

サークルの飲み会で普段は全くお話することのない3年生と話す機会があ

った。

今思えばこれがネットビジネスを初めて知ったときだった。

最初は普通に話してたのだが、

なんとなく話の流れで先輩に「バイト何やってるんですか？」と聞くと、

「バイトじゃなくてビジネスやってるんだよね」と言われ驚いた。

さすが慶應だなと正直思った。

今までビジネスやっている人なんて近くにいなかったから天然記念物みた

いな感じだった。

そこで話してたことは

サラリーマンは会社に依存しているから仮に大企業に就職したからといって

安定はしない。

みんながそれでも就職するのは周りも就職してるから大丈夫だろうというだ

けで、思考停止になってしまっているのだとか。

あとは先輩がTwitterで稼いでるとか言ってて、

アフィリエイトがどうこうとか話してもらったのだけど

さっぱり分からなかった。でもすごいことをやってるのはなんとなくわかった。

僕の知らない話ばかりで、本当なのか？と疑ったりもしたが、それでも先輩が嘘をついてるようには見えなかった。

すごい話を聞いたなと興奮したし、

なによりも刺激的で退屈だった僕には刺激が強すぎるぐらいだった。

ただそのときは自分もやってみようとは思わず、何も行動を起こさなかった。

それから1か月ぐらいたって、

大学生活も暇すぎて退屈すぎてどうしようもないとき、

Twitter をイジっていたらなんかうさんくさい人が出てきたのだ。

そこに書かれていたのは大学生が月収100万以上稼ぐ方法教えます！

と

いう内容だった。

なんだこれ？しかも同じ慶應の人らしい。

最初は正直これは絶対詐欺だなと拒絶反応を起こした。

しかしふと思い出したのだ。

そういえばあの時の飲み会でめっちゃ稼いでいる人が他の同期にいるとか

言ってたなと。

もしかしてこれはその人なのか？なんかそんな気がしてならない。

僕はそれでも不安を抱えていたが、その時はどうしようもなく退屈だったの

で

勇気を出して Gmail の捨てアドでメルマガ登録をした。

そして僕の人生はここから大きく変わるのだ。

メルマガの登録は僕にとって生まれて初めてのことであった。だから驚くことも

多かった。

まず毎日同じ時刻でメールが届いてくることだ。

最初は少し気味が悪かった。

何でかというと僕はてっきり毎日同じ時間に手動でその人が送信ボタンをポ

チっと押していると思っていたからだ。

もちろん今は自動でメールを送れるシステムを知っているので何とも思わな

いが、最初はびっくりした。

でもでも1番やっぱり衝撃を受けたのがメルマガの中身。

毎日すごい長文で送られてくるのだが、スラスラ読める。

だって超面白いんだもん。

普通に日常を過ごしていたら絶対に知ることのない情報が

毎日送られてくることは当時の僕にとってこれ以上ない刺激だった。

価値観が毎日崩壊していくことがだんだんやみつきになっていき、

メールが届くのを毎日楽しみにしていた。

僕のなかでビジネスを始めるためにはお金をたくさん調達したり、前もって

何年か勉強したりしなきゃいけないものだと思ってた。

僕のなかでビジネスで稼ぐということはジョブズやザッカーバーグみたいに

パソコンに強くて世界をあっという間に驚かせる発想力がないと無理だと思っていた。

しかしメルマガには資金も人脈も才能もいらなくて、誰でもすぐに始められる

し稼ぐのも簡単ですよと書いてある。

なんだって！？これはやってみるしかないでしょ！

ということでメルマガの最後に返信していただけると喜びますよ！

と書いてあったので、喜ぶなら返信するしかないと決心した。

僕はメルマガの感想に加えて、無理を承知で直接お話を聞きたいですとい

った。

今思えばかなり無礼なオファーをしたのだが、

慶應の後輩であることが功を奏してご飯に行かせてもらうことになった。

このときが1番慶應入って良かったなと思ったときかもしれない。  
しかしあまりにもスムーズにご飯が決まってしまう、  
うれしかったのだが急に怖くもなった。  
だって相手は大学生でえげつなく稼いでる人。  
僕の常識には存在しない。いや本来存在してはいけない人なのだ。  
とりあえず何か失礼があってはまずいと思い、  
ブログや YouTube を検索して片っ端からみることにした。  
ブログなどを見て先輩がどういった考えをしているのか  
先にリサーチすることで会話がしやすくなると思ったからだ。  
そして何よりも得体の知れない人と会う前に恐怖を打ち消す方法が  
これしか思いつかなかったのだ。  
先輩のブログも YouTube も見てみると、  
僕にとってそこで語られていた情報は何もかもが新しい世界で  
血眼になるぐらい目をギラギラさせながら見た。  
僕はたしかに受験生時代は勉強しまくっていた。  
でもそれは受験という世界を深堀りしただけで  
世の中のことは何もわかっていなかった。まさに井の中の蛙だったのだ。

特にやりたいこともなく、心身ともに枯れていて路頭に迷っていた僕は  
今ま  
で見たことのない魅力的な世界に出会うことで水を浴びて生き生きする  
よう  
な感覚を味わった。  
こんな人みたことなく、とにかく圧倒された。  
いったいどういう人生を送って来たらこんな人間になるのか？  
そんなことを思いながら、先輩に会う日を待ち望んでいた。  
そしてご飯当日、僕はあんなに稼いでるのだから高級料理店に行くのか  
な  
と勝手に緊張したが、場所はサイゼを指定された。  
冷静に考えれば、これは当然だ。  
得体のしれないただの学生のためにそんなところいく必要がない。  
僕はとんだ勘違い野郎だ。

それでいざ実際に会って話してみると  
メルマガよりも内容の濃い話を延々とマシンガントーク。  
内容が異次元すぎて僕は頭がパニック状態だった。  
常識をぶち壊すパンチを浴びまくって KO 寸前だったのだ。  
話し終わった後も今まで感じたことのない興奮がずっと冷めないまま続  
いて、  
家に帰っても全然眠れなくらいだった。  
こんな気分になったのは人生で初めてだった。  
こうして僕はその先輩が楽しそうに生き生きとビジネスについて話すの  
を間  
近で体感して、  
自分もビジネスの世界に足を踏み入れてみたいと強く心に思ったのだ。  
そして僕はまずせどりというものを始めた。  
最初にせどりを選んだのは面白そうだったし、  
簡単に稼げるよと言われたからだ。  
たしかにせどりでやることはシンプルだ。  
Amazon より安い商品を見つけたら仕入れて倉庫に納品するだけ。  
あとは Amazon が勝手にやってくれる。  
なんて簡単なんだ。  
今までビジネスをすることは大変なことだと思ってたが、  
実際にやってみるとそれは本当に勝手な思い込みだった。  
それから僕はいろいろお店やネットでリサーチすることが楽しすぎて  
四六時中せどりのことを考えていた。  
しかし稼げるようになるまでは割と時間がかかった。  
1 日中リサーチしても利益がとれる商品が見つからないなんてこともあっ  
た。  
何度もビジネスやめてもいいんじゃないかと心が折れそうになったが  
やめたところで退屈な毎日にもどるだけで、そのほうがもっと嫌だった。

じゃあどうやってビジネスを続けていったかというのと、  
とにかくお金をつぎこんだ。  
セミナーやら教材やらコミュニティやらに自己投資をしまくった。

こうすればつぎ込んだお金を絶対に回収しなきゃと自分にプレッシャーをか  
けられるからだ。  
そして効果は絶大だった。  
あれよあれよと利益が出るようになりあつという間に回収することが出来た  
し、  
その自己投資したお金は何倍にもなって返ってきた。  
そのときはほんと興奮したし、  
何より自分がやってきたことが報われてうれしかった。  
今では自分がせどりで稼いでいることを話すと  
友達が教えてほしいと言ってくるので、  
今では動画とかをつくってあげて基本的なことから教えたりもしている。

また僕はいま仕組み化に挑戦している。  
仕組み化とは自動で収益を生み出すような仕組みをつくることだ。  
仕組み化するために集客、コピーライティング、外注化などなどたくさん勉  
強しているが、  
これらをマスターしたら本当に何でも出来ちゃうなと感じている。  
まあとにかく今は勉強することが楽しい。  
高校のときはただの苦行でしかなかったけど、今はほんと楽しすぎるの  
だ。  
最後に僕は勉強はそれなりに出来たのだが、図工や美術は恐ろしいくら  
い  
出来なかった。  
英語とか数学は問題が1つあれば答えも必ず1つある。  
しかし図工や美術は違う。正解なんてものはどこにも存在しない。  
よく学校の授業で  
「テーマは自由です。みんなの好きなものをつくっていきましょうねー」とい  
うのが  
僕は苦痛で仕方がなかった。



何もアイデアが思い浮かばないから、何もつくることが出来ないのだ。  
僕は答えがあるなかで解答を導き出すのは得意だったが、  
答えがない中で自分なりの答えを出すのは苦手だった。  
よく考えれば自分の人生も答えなんかない。  
誰かから答えを用意されるのを待っていたらあっという間に死んでしま  
う。  
受験生の時の僕は自分が何をやりたいかなんてものは全くなく、  
どの方向に歩いているかも分からず、  
最終的には身動きがとれなくなり金縛りにあった。  
受験生の時は勉強のことを考えると  
頭が押しつぶされるようなつらい感覚だったけど、  
今は新しいことを知れば知るほど世界が広がっていくので、楽しすぎる。

数年前の自分じゃ今の自分は全く想像できないだろう。  
僕は今までビジネスで成功している人をたくさんみてきた。  
どんな人も謙虚で現状に満足しないで常に向上心に溢れる人ばかりで  
自分もこうなりたいと思わせるような魅力的な人ばかりだ。  
そしてその人たちを通してお金を稼ぐことで得られる素晴らしい未来も  
たくさ  
ん見てきた。  
好きなときに好きなことが出来る自由な時間があって、  
周りにはその人に共感する仲間たちがいて、  
多くの人に価値を提供することができるから多くの人に感謝される。  
こんな華々しい生き方があるのに僕は見て見ぬふりはできない。  
僕はこんなライフスタイルに憧れる。いや絶対になるんだ。  
今回このレポートでは  
今までの人生を細部までこだわって振り返っていく中で、  
自分の嫌いな部分と向き合わなければならなくて、無茶苦茶つらかった。

でも振り返ってみて良かったなとすごく思う。  
自分が今までどう生きてきたかを知ること、  
頭の中がちゃんと整理されて、自分はこんなやつだったのかと知って、

たまに自分が知らない自分が浮かび上がってきて驚くことが多々あった。

なんせ普段過去をしっかりと振り返ることなんてやらないので、得られるもの

がすごく大きかった。

だからこそできる限り自分の素直な気持ちをぶつけてやろうと思った。

そして僕がリアルな自分をさらけ出すことで

みなさんに何か1つでもいいから感じ取ってもらい、

人生をいい方向へと導くきっかけとなればいいなと思います。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

感想送っていただけると嬉しいです。

[spnneamd@gmail.com](mailto:spnneamd@gmail.com) まで！

メルマガではもっと濃い情報を発信してます！

<http://bit.ly/1RpORUT>